

たかが川柳されど川柳（十）

上野 一彦

捨てる神あれば拾う神あり

歳をとると嗜好が変わるといいますが、私は子供の頃から七〇を超える今日に至るまでブルブルとした食感のものが大好きだ。プリンもゼリーも寒天も、くず餅もワラビ餅もこんなにやくも煮凍りも、はたまた杏仁豆腐、湯豆腐、冷や奴とどこまでも広がっていく。兎に角ブルブルとしたその手ものは何でも好きだ。あの張り、あの弾力、あの儂さ、あの淡さ・・・一見柔らかいがしつかりとした存在感があるうえに、角に頭をぶつけても死ぬ心配もない。

とりわけ寒天は海藻という栄養学的にも類まれな出自を

という思い出もなかった。

それが学生時代、敬愛する恩師の「柿ほど美味しいものはない」との言葉に、柿への意識を強く高められ、最も好きな果物へと変わっていった。白桃にありがちな当たり外れも、梨であつて梨とは違う、微妙に食べ頃がむずかしいフランスなどよりも、柿は誠に身近で季節感のある果物として、老境の私の心をしっかりと掴んでいる。

もうひとつ私の好物は豆である。これは箸休めというか、常に何がしかの煮豆を食卓に置いておくのが我が家の習慣だった。結婚してからそれが世間一般の習わしでないというところも知った。子供心であれば食べるが、どうしてもなくては困るものではなかった。しかし、おふくろの味というものは決して忘れるものではない。

正月ともなれば、きんとん、伊達巻き、なます、数の子、蒲鉾、田作り、煮しめ・・とおせち料理が思い浮かぶが、定番中の定番は何と言っても黒豆であろう。前の晩から水に浸け、戻した豆をごくごくの弱火でじっくり根気よくコトコト煮る。しわがよらず、つやつやのふっくら柔らかな黒豆煮。

田舎者の母はその出来映えを人から褒められることを何よりも喜びとしており、近所に住む姪たちに季節になると

もち、肥満や生活習慣の乱れのなかにあつて、最大の課題であるカロリーを気にしなくてもよい理想の食材でもある。世の中万事、健康志向の昨今、肥満解消を最大の課題とする面々にとつて、心強い味方というか、信頼できる同胞であり、無二の親友とも呼ぶべき最高の食品。寒天こそこれらブルブル族の王といえる。

一方、子供の頃にはさほどではなかったのに歳をとつてから好きになる食べ物もある。例えば、私の場合、それは柿と豆である。柿は近所の祖母の家の庭に毎年無造作にたくさん成つており、取り立てて珍しくもなく美味しいもの

その技を伝授したりしていた。いつの間にか、好むと好まざるとにかかわらず、私と煮豆は切っても切れない割りなき仲となつていった。そして、発酵食品の代表、納豆も冷蔵庫の中でいつも定位置を占めている。豆は畑の肉であり、不滅の食卓女王である。

我が嗜好の歴史の一端を長々と述べてきたが、五十歳を前にして、私の中のブルブル王「寒天」と、食卓女王「豆」とは劇的な出会いをした。それが浅草観音堂裏の「梅むら」の豆寒天（豆かん）との邂逅である。間口一間半程の小さな店だが、元祖豆かんの甘味処として浅草で知らぬ者はない。評判どおりのシンプルで本格的な豆かんが提供される。日曜定休だが、平日訪れるとよく臨時休業の看板が出ているところに難点があるにしても。

この出会いから私の豆寒天放浪記が始まった。偶然見つけた神楽坂坂下の「紀の善」や多くの店での豆かん探訪については、機会を改めるとして、甘味処や〇〇茶房という店の名には磁石のように惹きつけられる。あんみつやみつ豆の缶詰の果物は私にとつては邪魔。とりわけ妙に毒々しいサクランボは獅子身中の虫ならぬ天敵に等しい。

巢鴨のとげ抜き地蔵裏の「甘露七福神」は代わりにクコの実が載せてあつた。たまに黒蜜にしますか、白蜜にしま

すかなどと余計な選択を迫られるが、焼き鳥のタレと塩同様、上品ぶつてはいけない。焼き鳥はタレ、トンカツはソース、豆かんは黒蜜なのだ。白蜜などと言うのは邪道、豆かんに許されるのは小豆から作られる上品なこし餡だけである。

兎にも角にも、寒天はちまちまと上品ぶつた大きさではなく、歯触りが楽しめるしつかりとした大きさであること。風味が命であり、伊豆七島の寒天らしい寒天が極上。麻布十番にあった「パポタージュ」（残念ながら閉店）の寒天はよかった。

そしてその寒天を覆い尽くす赤えんどう豆。あくまでも寒天の邪魔をしないやさしいお豆さん。大山参道の途中にある茶店のメニューに豆かんの文字を見つけた時はうれしかった。お姉さんが「家のは赤えんどう豆じゃなくて紫えんどう豆なのよ」と言われた時は、それなりの誇りとこだわりが伝わってきた。

先月、築地で少し時間があつたので聖路加病院の反対側にある築地茶房に久しぶりに寄った。カーテンが引いてある。「あつ今日は定休日だったか、いやそうじゃない」店先に貼り紙。

『昭和四六年の開業以来四五五年に渡り、当地にて営業さ

せて頂きました。築地茶房は三月末、二八日(月)をもちまして閉店させて頂きます。(後略) 平成二八年三月 店主』

何と一年半も前に店をたたんでいた。昭和がまた一つ消えた。「パポタージュ」の閉店も唐突だったが、駒込に開店した麻布茶房の流れをくむ「思い川茶房」もいい店が出来たと喜んでいたら何が理由かはわからないがあつという間に閉まってしまった。甘味処と古本屋の閉店は年寄りには堪える。

爺さんが逝って婆さん店を閉め

がっかりしてそのまま歩き続けると小路の角に立て看板。『この奥四〇m、美味しい豆かんあります』

たいして期待もせずに細い道に迷いこむと、見落としそうな小さな小さな店があつた。それが豆かん専門店「天まめ」。風味溢れる豆と神津島の寒天。捨てる神あれば拾う神あり、禍福は糾える縄の如しというか、これだから人生やめられない。

以来、築地に用がある時は必ず寄る。ただし、帰りではなく行き。店仕舞いが早く、五時には翌日の準備に入るた

めお持ち帰りのみ。もつともそんな時でも待つ間お茶を出してくれる。翌週、無理に都合をつけて性懲りもなくまた出かけた。ところがケースにはお持ち帰り用さえない。

がっかりしている私を見て若い女主人は、せっかく来ていただいたのにすみません。お茶でも一杯とまた店のなかに入れてくれた。この日はおいしいお茶だけでなく、お茶うけにおいしい煮豆まで。こうした心配りの店の豆かんだからこそ美味しいに決まっている。長生きはするものだ。

水指余話

彼女のカウンターの後ろの棚に、白磁に紺絵と赤絵の水指が一对飾ってあつた。それは築地の小さな甘味処でのことであつた。

私は茶道などとは縁の薄い男ではあるが、蓋つきの陶器に関心があつた。西洋にもないわけではないが大体は菓子壺で、華美な装飾が施されており気に入らなかつた。磁器がいいか、陶器がいいかは好みだろうが、仕事で地方に行く時、時間を作り窯元など案内してもらうこともあつた。

たまたま岡山で学会があつた時、家内を誘って備前の街をぶらついた。素人ながら陶芸を趣味にしていた亡き母が一番好きだったのが備前焼きだった。釉薬を使わずに焼き

締める備前は、日常使いの器と聞くが素朴ななかにも温かみと品が感じられる。

窯出ししたばかりというものの中から使い勝手の良さそうな飯茶碗を二つ買い求め、晩秋の川沿いの道を散策していた。そろそろ終わりにしようかと何気なく入った店の棚に水指があつた。誰もおらず奥に声をかけると人の良さそうなお婦人が言い訳しながらやつと出てきた。商売つきのない家である。

この水指が目に入ったのだがという他にもあるからと座敷に上げられ茶を振舞ってくれた。無造作に並べられた水指を二つ三つ。矯めつ眇めつしたがやはり最初に目に入ったものを家内も気に入る、値段を尋ねると手が出ぬ程でもなかつた。「これを頂きたい」というと、「主人をよんで来ます」と裏にあるという工房に行ってしまった。全くにして商売つきのない家だ。

それが陶芸家森陶山先生との出会いだつた。何を話したのか今となつては定かでないが、窯入れや火襻の技法や二代目を継ぐ息子さんのことなど楽しく気持ちのよい時間だつた。後から梱包され送られてきた水指にはいいねいな書状と先生の作品である湯呑みまで添えられており、私の掌にあう一番お気に入りの湯飲みとなっている。

話し変わって、ある私大に務める友人の研究室のパーティに呼ばれた時、一人の闊達な妙齢の婦人と知遇を得た。なかなか小説などの話題にも詳しい方で思わず話し込んでしまった。茶道を趣味としているというが、茶器にまつわる興味深い話から、やがては彼女の使い慣れた水指を自分の骨壺にしたいという夢にまで及んだ。初対面の私としては忘れられない夜となった。

この時の話は私にとってその日一番のものであると同時に驚きでもあった。というのと同じ夢というか願いを私、いや私共夫婦が持っていたからである。今、陶山先生の水指は寝室のアルコールに、やがてその住人となる我々と共にある。

ところで冒頭の甘味処の話の続きなのだが、話が水指になると彼女があっけらかんと言った。「父と母の骨が入っているんです」

N君のこと(弔辞に代えて)

妙に熱いところのある奴だった。六大学では伝統的に一弱だった東大が一五年ぶりに法政から勝ち点をあげた夜、無類の六大学好きだった彼がきつと大喜びしてらだろとショートメールを送った。彼の死のちようど一か月前だった。

快人N君のいふ

私の友人N君は、北陸の小さな町の旅館の息子である。今は某国立大学の教育学部で教授をしている。私との付き合いは古く、大学、大学院、助手と、なんと一二年もの長きにわたって机を並べていただけではなく、後で分かったのだが、浪人時代の予備校まで一緒であった。

LD教授(パパ)を自称するように、私自身、少々、いや、かなり個性的であることを自覚しているわけだが、N君も別の意味で非常にユニークな人物であり、そのユニークさは群を抜いている。

学生時代よく一緒に旅行したが、たまたま立ち寄った友人のお宅で、食事に『ひじき』の煮つけが出された。N君と友人の母上との会話。

「お母さん、このぜんまいおいしいですね」

「あらNさん、これはぜんまいじゃなくてひじきですよ」

「あ、そうですか、僕は海育ちなもので」

「?????」

そういえば、みんなで妙高池の平にある大学の寮にスキーに行ったことがあった。彼は能登に帰京しており、現地

返事が来なかったのは初めてだったので、どう連絡したらよいのか思い悩みつつ、今でもメールはそのままになっている。

いつだったか彼の家の近くで仕事があり、ふと思いついて電話をすると最寄りの駅まで車で迎えにきてくれた。そんなことが何度もあった。友達甲斐のある奴だった。大学、大学院、助手と一〇年余、机を並べた。それぞれ大学に奉職した後も、縁あって連合大学院(東京学芸大学、横浜国立大学、千葉大学、山梨大学が連合して博士課程をもつ)で同じ講座の教授として再会することになった。常に絶えることなく、親しくつきあった。

素朴な好人物であり、都会人であり俗っぽい私とは好対照ではあったが、どこかウマがあい、というか合わせてもらっていたのかもしれない。そんな彼だから、自称エッセイストの私の格好の題材として何度も登場している。印税の一部を払えと言ってはいたが、代わりに麻雀でだいぶ振り込んだので我慢してくれ。その一節を弔辞代わりに紹介する。

見送りの友のいるうち立つが花

合掌

の妙高高原の駅で落ち合ったのだが、なんと自宅から、買ったばかりのスキー靴を履いてきた。雨には長靴、雪にはスキー靴と誤解していたようである。歩くにくそうに、まるでロボットのようになり、ドッタ、ドッタと、でもどこか得意そうにやってくる姿に絶句した。

すこぶるつきの好人物で誰からも愛された。思わず世話をしたくなるそんな得な性分の持ち主でもあった。彼のそばにいとなく穏やかな心地よさがあり、兄貴面とつかよすぎる。個性的な私の存在を許してくれる、心の広い友人のひとりであったと言わなければならない。怪人ならぬ快人たる所以である。いわゆるLDとは別のタイプのLDとでもいえるべきか。

よく言えば少年の心をいつまでも失わない典型的な人物でもある。神宮球場が好きで、未だに母校の応援に時折、足を運んでいるらしい。彼と話していると誰でも青年時代にあつという間にタイムスリップする。同窓会などでも「一番変わってないのはNだな」と異口同音にいわれる。教師と言う仕事は、年毎に、学生との年齢差がひとつずつ増える仕事でもある。気がつくとい前は楽しかった学生との付き合いが、少々億劫に感じてくるものだが、どうやら

万年青年であるN君には当てはまらないらしい。

とところでそのN君だが、よく失くし物をした。これも一緒に旅行をしたときのことだった。いざ帰路の列車に乗ろうとする改札口で、パタパタとポケットをあちこち探している。案の定、切符がなくなつたという。またかと思いつつ、ともかくポケットの中身を、ここにみんな出してみるとアドバイスした。

すると出てくるわ、出てくるわ。ふくらんだポケットの中から、かんだ鼻紙、メモ用紙、領収書、ガムの包み紙、なんとタバコの吸い殻まで何本も出てきて一山となった。ポイ捨てはいけないと、吸ったタバコをもみ消し、自分のポケットにそのまましまひ込むと言う道徳の鏡のような人物なのである。

最近では車から何でも捨てる不心得なドライバーが増え、なかには生ごみや紙おむつまで走行中に投げ捨てる例さえあると言うのに。N君の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたい。それにしてもタバコの吸い殻には脅かされた。N君ならではのことである。ところでその切符はどうしたか、ですって？ゴミの山のなかにも見当たらず、結局買いなおす羽目になった。こうしたことは彼にとつて普段から珍しいことではなかった。

たかが川柳 されど川柳 (平成二九年下半期)

七月

だんだん (五四号)

核の傘差して貰って付いていく 佳作

◇だんだんの大師匠岡部達昭先生からは「アメリカの核の傘の下で生きていくしかない日本の現状を痛烈に詠んだ佳句。鋭い。」との評をいただいた。達昭先生ありがとうございませう。核禁止条約に賛成しないわが政府。ただ米国の後を追従する姿勢に詠まざるをえない心境。

平和呆け夫唱婦隨の勅語好き

◇森友か安友か知りませんが、歴史に学ばず教育勅語を誉めそやすアナクロニズムにはうんざりです。

人質をとつて横紙また破る

◇人質をとろうが、ミサイルを発射しようが、核実験をすべて正当化する神経は横紙破りそのものです。

題詠「キャンセル」

キャンセルを互いに避けて良き夫婦 佳作

◇離婚も一種のキャンセル。きっとそれを避け、良い夫婦と言われるためにはよい我慢ができたということですね。

使用後の返品効かぬ原子力 佳作

◇そうなんです。原子力はあとから返品が利かぬ品物であることをよく考えて利用してほしいものです。

ドタキャンを減多にしないあいつ逝く 佳作

◇付き合いのよかつたあいつ。あいつが珍しくドタキャンしたと思つたらそれが終の別れになるとは・・・

多年草 (九五号)

稲田の穂刈らずに国は守れない 最優秀

◇言葉の軽い防衛大臣。これがわが国の政治家の実態。こんな人に任せて国は本当に守れるのだろうか。任命責任も取ろうとしない総理。まさに人選ミス。

都議選挙あなたのおかげ真由子様

◇「このハゲ」何回いや何十回NEWSに流れたことだろう。都議選の与党の惨敗はここに始まった。

ミサイルに遺憾遺憾の的外れ 佳作

◇ミサイルを発射するたび遺憾の意を表する政府。何の効き目もない声明。イカンイカンこれじゃイカンと思わないものかね。

題詠「聞く」

聞く耳を持つばストレス倍増し 佳作

◇聞く耳を持つことは素晴らしいが、その分ストレスは倍増。聞き上手といわれる人を尊敬します。

聞き上手うなづきだけで耳を閉じ

◇聞き上手と思われる人、実はそのうなづきも振りだけだったりして。コミュニケーションというのは難しいものです。

聞き取れずああそうなのと受け流す 佳作

◇歳をとると耳が遠くなります。いちいち聞き直したりするのも面倒なので、「ああそうなの」と軽く返事をします。が実はよくわかっていないことが多いものです。

八月

多年草 (九六号)

支持率で厚顔無恥に炎をすえ

◇内閣支持率の変化を政治家は気にします。選挙と選挙の間ではこの支持率で民意を反映するしかないようです。

核のない空に飛び立て千羽鶴 優秀

◇唯一の被爆国。その立場を忘れたかのような言動の政治家が目立ちます。千羽鶴は被爆者の平和を願う思い。

ミミズさえ命投げ出すこの暑さ

◇酷暑故、地中のミミズまでが地表にはい出て干からび

ます。そんな風景を見てなおさら暑さを感じます。

題詠「虫」

窓開けりや頭を殴るセミの声

◇窓を開けたとたんに真夏のセミの合唱が飛び込んできます。まるでその勢いは頭を殴打するが如し。

三十路過ぎ虫干しなんて贅沢な

◇悪い虫がつかないようにと心配するのは適齢期の親。その期を過ぎるとなんでもいいから片付いてくれ。

鳴く蟬よ七年後にはまた会おう

◇地中七年、地上に出てわずかな期間で卵を産み、また地中での幼虫時代を過ごすセミ。今度お目にかかるのは七年後と思うと・・・

九月

だんだん（五五号）

ひとつづつ重荷降ろして旅支度 佳作

◇断捨離ではないが、身の回りの物を少しずつ整理し始める。そうして身を軽くしているがこれこそ最後の旅支度というわけ。

テーブルに酒と菓が同居する 佳作

◇先日友人二人と旅行をしたら食後にみんな菓を常用。

それも各人数種類ずつ。わが国の菓天国、ここに極まりと思つた次第。我が家のテーブルにも酒と菓がいつも置いてある。

そのけそのけ百合子様を通る

◇先月の都議選挙、直前の国会議員の相変わらずの不行跡、失言で、一強安部自民党の代惨敗。小池知事の緑一色となった。

題詠「リボン」

アルバムのリボンの君も褪せていく 佳作

◇初恋の彼女はいつも大きなリボンの目立つ子だった。あの頃リボンだけでも相当なおしゃれだった。

まごころをリボンで結び贈ります

◇たいしたことはできないが、いつも真心をリボンで結んで差し上げたい。そんなものいらぬ・・・といわれそうだが。

性不詳リボンの騎士は先駆けぞ

◇リボンの騎士、われわれには懐かしい漫画、いやアニメの主人公。今思えばLGBTの先駆けだったのだろうか。

多年草（九七号）

ファースト茶二番煎じもまだ飲める 佳作

◇〇〇ファーストは流行語。都民ファースト旋風にあやかつての国民ファーストの二番煎じも多少は影響あつたようですが。

ミサイルと憎悪で憂さを晴らす国

◇ミサイルと核実験、あからさまなプロパガンダで世界の平和を脅かす北朝鮮。情報統制下にある洗脳国家の怖さですね。

一戦を交えた果てに線越えぬ

◇文春砲、NEWSになると一線は越えていませんと居直る。お国柄かもしれないがやりました、やっつてしまいましたと認めたほうがすつきり。

題詠「東京」

小走りで顔を見ないで暮らす街 佳作

◇誰もが小走りで挨拶もろくにかわさないで生きているような都会。それが東京。

江戸っ子もお上りさんの成れの果て

◇三代週ればみんな地方出身者、江戸子でいと粋がつて

みてもしよせん出自をたどれば田舎者ではないんですね。

大都会星もなければ空もない

◇智恵子じゃないが東京には空がないだけではなくて天の川もないんです。東京の子供はかわいそうですね。

一〇月

多年草（九八号）

孫帰るホツとしながら抱きしめる

◇孫はかわいい。でもとても疲れる。帰るときさみしいがどこかでホツとする気持ちがある。また来てねとしっかりと抱きしめる。それが日常。

もりかけも緑のためき食べ損ね

◇森友、加計問題はどうも納得がいけない。それを梃に緑の希望の党。でもなんだかあの方も狸に見えてくる。

モリそば、カケそば、緑のタヌキと赤いキツネ。

さらさらと流れ去ったか初総理 佳作

◇リセットします。さらさらありません。排除します。たった三言で政局の流れが変わりました。読み違え、知事にUターン。女性初総理も夢のまた夢。

題詠「料理」

愛情が濃いから味が薄くなる 優秀

◇高血圧対策は減塩。かみさんの愛情が濃ければ濃いほど、料理の味は薄くなります。あーあたっぶりソースをかけてとんかつ食べたいな。なんて罰当たりな。

無国籍何やら怖い食べ物ね 佳作

◇巷には無国籍料理なる看板増えてきました。日本料理屋さんのお店の外人もなんだか不思議な気がします、そもそも無国籍料理ってなんでもありということ。料理のテロリズムだ！

材料も手間も手抜きの賢夫人

◇お嬢様はたっぶり材料を買い、たっぶり時間をかけて、ゴミもたっぶり、そしてレシビ通りに立派な料理をお作りになる。賢いご婦人は、余った素材でおいしい料理をサツサと作る、これが手練の技というもの。

一月

だんだん（五六号）

虫の音に時代遅れのセミ混じる

◇秋になると集く虫の音。そんな中に季節外れの、いわ

ば時代遅れのセミの音が混じる。まるで私のような。

ひやおろし一夏越していい女

◇春にしぼられた酒を、ひと夏を超して秋まで貯蔵、熟成し、秋に出荷するのが「ひやおろし」。ひと夏越すとぐっと女っぷりがよくなるムスメゴがいます。まるでひやおろしのような。

被爆者の涙忘れて山河なし 佳作

◇国連での核禁止条約に賛成票を投じないわが政府。これでは唯一の被爆国であるわが国の犠牲者は浮かばれない。国破れて山河在りとは言うがその山河さえ否定される気持ちがわからぬ政治家って何なの。

題詠「ホーム」

連休もホームがいいと独りもの

◇この独り者は老人ホームの孤独な老人。お盆や正月も住み慣れた老人ホームのほうがいいという。こうした老人がだんだん増えているとホームの人から聞きました。

子離れのついでに妻も離れてく 佳作

◇家を構え、子育てし、やがてその子供たちも巣立っていく。やっとな夫婦水入らずになったかと思えば熟年離婚妻が離れていくことのないように努力し続けなければ。

返済の終わる頃には皆巢立ち 佳作

◇都心の一軒家は高い。何とかローンを組んで手に入れ、そのローンがやっとな終わった頃には皆巢立ち、エンブレイ・ネスト（空の巣）。念願の書齋は手に入れたが家庭内別居にならないようにね。

多年草（九九号）

幕が降り希望失望絶望ね 佳作

◇総選挙が終わった。希望の党は竜頭蛇尾。多くの人々が失望からやがて絶望に。一体責任はだれがとるのやら。賞味期限なければゴミは減るでしょう 佳作

◇米国ではギャベージといって大型のトラックが家庭のごみをどっさり運んで行ったが、今やそれはわが国でも同じ。賞味期限などなければグリーンと減る気がするのです。

ポチ化してゴルフ場でも尾っぽ振る 佳作

◇アメリカ政府の飼い犬のようにただただ媚びを売るわが政府。まるで忠犬ポチのようじゃありませんか。品のない大統領を最大限にもてなし、来日早々ゴルフ場へ直行。いつまでも尾っぽを振っているんですか。

題詠「法」

仏法の功德の量も算盤で 優秀

◇坊さんの世界もすべて算盤づく。無税の上になんにも値段がつく。本来宗教とはそんなものではなかったはずなのに。

法事では次は誰かと探りあう 佳作

◇法事などがあると、いつの間にか最年長であったり施主であったりする。歳とはそういうものなのだが、今度は誰かなという目が気になる。

悪法も平時は牙を隠します 佳作

◇もつともらしい理由をつけて法律が成立する。かつての治安維持法などもそうだが、平時には当たり前であったものが、いざとなると牙をむくことがある。そこまで考えないのはお人好しか。

一二月

多年草（一〇〇号）

親方は土俵の外で大相撲 優秀

◇貴乃花は真面目なんですよ。彼のこともっと理解してやらないといけないよね。ただそれだけ。本当に大相

撲って国技なんですか。

冬將軍インフルエンザを引きつれて

◇インフルエンザの予防注射受けましたか。今までたくさん風邪をひいたからもう免疫できすぎかもしれないですよ。お大事に。

ただ風が吹いているだけ昭和逝く

◇ハシダノリヒコが逝きました。フォーククルセイダーズって僕らのフォークの原点だったと思いますけどね。でも若い人は知らないんだね。

題詠「ロ」

口喧嘩それは夫婦の会話です 佳作

◇安心して口げんかができるなんていいことかもしれないません。どんなに親しい友達だってなかなか元には戻れないもんですよ。

吾がそばに君が居て唯足を知る

◇口がつく漢字がこんなにあるなんて驚きですね。でもカミさんのことをこんなふうに読んでもきつとみんなはわからないでしょうね。

おしゃべりなA I ロボに腹をたて

◇。ペッパーくんは「ねえねえ」で始まります。「いま、

おひま？」「暇じゃねーよ」登録しておくと「まりちゃん！」「なんて馴れ馴れしい奴だ」

(了)